

## 日本語教育実践研究 (4)

## —「初級実践研究」について—

川口 義一

早稲田大学大学院日本語教育研究科の「日本語実践研究」は、留学生のための日本語クラスに大学院生が参与観察に来て、別の講義の時間にその観察結果を討論するという形式の講義です。他の大学院で言えば、「日本語教育実習」に当たる内容のものと言えるでしょう。ただ、他の大学院と異なるのは、まず観察するクラスが「実践研究」の担当である専任教授自身によって教えられているということです。通常の大学院では、教育実習クラスの担当教員と大学院の講義担当教員とは別ですが、早稲田大学の場合はその両者が同一人物であるため、教授内容やその背景となる言語教育観などについても、担当教員が責任を持って語れるというところに特色があるというわけです。

参与観察のありかたは、クラスによって異なっています。あるクラスでは、参加している院生が教育実習生として自分で教材を作ってクラスを教え、また、あるクラスでは、院生がアシスタントのような立場でクラス活動を手伝い、また、クラス内外で留学生の学習支援を行うなどの補助的教育活動を行います。そしてまた、別のクラスでは、院生は留学生と机を並べて座り、直接・間接の学習支援をしながら、教師の教室運営と学生の習得過程を細かく観察します。

このページの筆者が担当している「日本語実践研究(4)」は、最後のタイプの参与観察授業です。院生たちは、学期中に早稲田大学の留学生別科課程にある「日本語1 A」「日本語1 B」のクラスに入り、3ヶ月の全課程中、毎週1回、1コマか2コマ連続かで参与観察を行います。「日本語1 A」「日本語1 B」は、ともに初級前半レベルのクラスですが、前者が別科生用、後者が大学院生用のクラスです。第二言語としての日本語学習のこの時期に、留学生と机を並べて座り、いっしょにクラス活動に取り組み、かつ学習上のアドバイス求めや質問に応じたり、食事や買い物につきあうなどの個人的な生活にかかわったりするなどということは、学習ストラテジーの選択過程、学習ビリーフの変化、クラス・ダイナミックスの作用ありかたから、クラス・マネージメント方略、誤用訂正の方法など、第二言語の習得と教授に関するあらゆる側面を直接体験することができるということです。このことは、別の時間に置かれている「実践研究」の講義時間にさまざまな議論の種を提供することともなっているのです。

院生は、自分が参加した学期の最後に、参与観察中に関心を持った事項についてレポートを書くことが求められているのですが、第二言語の習得と教授に関する、豊かな情報源から切り出される問題は実にさまざまです。今回、『早稲田大学日本語教育実践研究』第5号の刊行に当たり、2006年度の春学期に提出されたレポートの中から、この刊行物の趣旨にふさわしい内容のものを2編選択して掲載します。この雑誌によって、読者のみなさんが初級過程における学習と教授に関する問題の諸側面を知ると同時に、早稲田大学における日本語教育の一端をもご理解くだされば幸いです。

(カワグチ ヨシカズ・日本語教育研究科教授)